

「やもめの息子を生き返らせる」

2015年06月12日

ルカによる福音書 7章11節～17節。それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるころだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

主イエスは弟子たちと共にナインの町に行かれた。すると、やもめの母親の一人息子が死んで、棺で担ぎだされるところに出会った。母親の唯一の慰め、支えであった一人息子が死んだ。耐え難い悲しみである。町の人々も彼女に同情し、悲しみを共有していた。主イエスは母親を見て、憐れに思い「もう泣かなくてもよい」と声をかけた。そして、棺に手をかけると、担いでいた人たちは立ち止まった。主イエスは「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と宣言された。すると、死人は起き上がり、物を言い始めた。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して「大預言者が我々の間に現れた」また「神はその民を心にかけてくださった」と言い合った。主イエスが死人を生き返らせた奇跡はユダヤ全土と周りの地方に言い広められた。

この「やもめの息子を生き返らせた」奇跡は、旧約聖書の列王記上17章のエリヤと列王記下4章のエリシャによる死者の甦りの奇跡を原型にしている。

福音書には主イエスの復活を除いて、死者の甦りの奇跡が3件記されている。① 上記のナインのやもめの息子である。② 会堂長ヤイロの娘が生き返った奇跡がマタイ福音書9章、マルコ福音書5章、ルカ福音書8章に平行記事として書かれている。③ ラザロの甦りがヨハネ福音書10章に記されている。ラザロの場合は、死んで4日も経っているので、完全な死からの甦りである。①と②の場合は、完全な死であるかどうか分からない。当時は、死の判定が正確でなく、仮死状態で埋葬されたケースがあったらしい。墓を掘り起こしてみると、棺の内側には爪でひっかかれていたものがあつたという。ある人が死の床で私に「ちゃんと死んでから焼き場に送ってください。そうでないと熱いですから」と言われた。彼のユーモアに感嘆し「大丈夫ですよ、医者が臨終を告げてから、丸一日過ぎてから火葬場に行きますから」と申し上げた。

①と②の場合は、仮死状態からの生還とも言えようが、そのような詮索は無意味である。聖書は、主イエスは死者を生き返される神の子であると告げている。今日、「脳死」を死と認めるかどうかについては判断が分かれるだろうが、死の判定に間違いはない。そして、死からの甦りもあり得ない。ヨハネ黙示録3章1節cに「あなたが生きているとは名ばかりで、実は死んでいる」と書かれている。主イエスに対する信仰は死んだような者を真に生かし、更に、肉体が死んだ後も神の永遠の命を約束している。その根拠は、主イエスの十字架の死からの復活であると告げている。